豊臣秀頼自筆書狀

京都文科大學所藏

この書は德川家康から鷹を贈られたに對する謝帖で、何年のものとも定め難いが、其書風より推せば、秀頼の晩年、彼二條城の會見に殿(秀頼)は殊之外成人にて候、大慶に思召候と申しながら、家康の黒き手が、刻一刻と壓迫を加へて、大阪の最後に近づきつゝあつた頃のものであらう。さしもに壯觀を極めた豊國の神事も昔の夢と消えた大阪落城の翌年(元和二年)時の城主松平忠明は市民の豊臣家追慕の情を移さんが爲め、家康が生前に遊んだ織田有樂齋の川崎の別墅に東照宮の社殿を構へたから、幕府もこれを喜んで此一書を別當九昌院に寄せたことは同寺什物の箱書で窺はれる。此寺は江戸の盛時に輪奐の美を極め、寺號も後に建國寺と改めて久昌山と號したが、今は寺も東照宮も跡絶えて、豊國神社の再現となり、早く散決した此書は此程大阪市富田氏の好意で、我京都文科大學に歸した。此書に臨んで、豊德兩家の盛衰や、忠明の苦心、さては幕府の意味ありげな寄進などを思ひ浮べると感慨が深い。〔三浦〕

今度の書状
一通 青蓮院殿
更被出吾家
[illegible]
別而自愛無比類
被仰付事尤の所
御礼可令申
[illegible]

卯月六日　秀頼

大御所方へ
[illegible]